日本植物病理学会ニュース　第 108 号

（2024 年 11 月）

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

（1）東北部会開催報告

令和 6 年度（第 60 回）日本植物病理学会東北部会は 9 月 19 日（木), 20 日（金）に山形大学小白川キャンパス（山形市）にて開催され，一般 37 名，学生 32 名（合計 69 名）の参加があった．講演発表は，菌類病 10 題，ウイルス・ウイロイド病 7 題，植物保護 3 題の合計 20 題であり，活発な議論と意見交換がなされた．幹事会・総会では次年度部会長に弘前大学農学生命科学部の田中和明氏が選出された．また，本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は, 青森県産業技術センターりんご研究所の平山和幸氏「リンゴ黒星病の多剤耐性菌存在下における防除技術の開発と普及」に授与された．初日の一般講演後にはキャンパス内の厚生会館にて情報交換会が開催された．磯貝雅道部会長のご挨拶のあと，来賓からご挨拶と乾杯のご発声をいただき，41 名の参加者により活発な情報交換がなされ親睦が深められた. 令和 7 年度は秋田県での開催が予定されている．

（長谷　修）

（2）関東部会開催報告

令和 6 年度日本植物病理学会関東部会は，2024 年 9 月 13 日に東京農工大学（東京都府中市）にて開催された．参加者は合計 148 名で，その内訳は一般 78 名，学生 70 名であり，昨年比 25%増となった．

一般講演では 30 題の口頭発表があり，その内容は菌類病，細菌病，ウイルス・ウイロイド病，感染生理関連，植物保護関連など多彩であった．講演発表に対する質疑応答では，学生や若手を中心に質問が絶えず，新鮮で活発な議論が交わされた．学生優秀発表賞には本年度は 17 名のエントリーがあり，吉田優香さん（信州大学 農学部），本田莉夏子さん（信州大学大学院 総合理工学研究科），赤堀真子さん（東京大学 農学生命科学研究科), 横井 智希さん（東京農工大学 農学研究院）の 4 名が受賞された（発表順）．

情報交換会には 79 名が参加し，前期開催地委員長の渡辺京子氏より乾杯のご発声をいただき，活発な情報交換がなされ賑やかに親睦が深められた．会の最後には，植松清次会員からご挨拶をいただき閉会となった．

翌日の 9 月 14 日には，同会場にて第 19 回若手の会が開催された．参加者は 55 名であった．川久保修佑氏（東京大学 医科学研究所），萩原隆介氏（(株）クレハ），遠藤藍氏（法政大学 生命科学部），柿澤茂行氏（産業技術総合研究所 生物プロセス研究部門）から研究およびキャリアについてのご講演をいただき，活発な質疑応答が行われた．講演会終了後は，キャンパス内にて屋外でのバーベキューによる情報交換会が行われ，学生・若手会員が料理を楽しみつつ賑やかに親睦を深めた．

令和 7 年度関東部会も東京農工大学で開催予定である．

（有江　力）

（3）関西部会開催報告

令和 6 年度日本植物病理学会関西部会は, 9 月 19 日（木）～9 月 20 日（金）の日程で，愛媛大学・城北キャンパスにおいて対面形式で開催されました．参加者は, 168 名（一般会員 96 名，学生会員 72 名）で，発表数は 88 題でした．9 月 19 日（木）午前 11 時から役員会を開催し，午後 1 時から総会が行われ，全ての議案が承認されました．次期部会長には愛媛大学の小林括平が選出されました. 次年度は, 京都大学の高野義孝氏を開催地委員長として，京都大学・北部キャンパスで開催されることが決定されました. また, 今年度は参加者に宿泊予定を事前にオンライン入力するよう依頼し，地域からのコンベンション補助の獲得に結びついたことから，部会長から今後の部会開催についても継続的な協力が呼びかけられました．総会終了後には，高野義孝部会長により，「関西部会と宿主特異性と私」と題した講演が行われました．一般講演は，3 会場で行われ，いずれの会場においても活発な質疑応答が行われました．9 月 19 日の一般講演終了後の午後 6 時 45 分より，愛媛大学生

協食堂「PALTO」において，対面方式で情報交換会を行いました．情報交換会には 136 名が参加し，開催地委員長（小林）の開会挨拶の後，高野部会長のご挨拶と乾杯のご発声をいただきました. 情報交換会では, 愛媛の地魚やじゃこ天，三津浜焼などの食事，地酒やみかんのお酒などを楽しみながら，有意義に親睦を深めていただきました．宴たけなわのころには，次期開催地委員長の高野氏と次期開催地幹事の峯彰氏からご挨拶をいただき，その後，鳥取大学の児玉基一郎氏から閉会のご挨拶をいただきました．2 日目の一般公演は，9 月 20 日の午前 9 時から開始され，ここでも活発な質疑応答が行われました.

また, 9 月 18 日（水）の午後 1 時 50 分より, 愛媛大学・城北キャンパスにおいて，日本植物病理学会関西部会・若手の会が対面で開催されました．参加者は，50 名でした．午後 2 時より，岡山大学の黒江香那氏，奈良先端科学技術大学院大学の富永貴哉氏，神戸大学の足助聡一郎氏による講演と質疑応答が行われました．参加者は研究内容や，研究への取り組み方など今後の研究活動に有益な情報を共有することができたようです．その後，交流会が開かれ全参加者による自己紹介やパネルディスカッションが行われ，研究への向き合い方や進路決定などについて議論がなされました．閉会後は懇親会が行われ，学生・若手会員が親睦を深める機会になりました.

今回の部会では前年度に引き続き，講演会および情報交換会を全て対面方式で開催することができました．運営のノウハウについて綿密に引継いでくださった前年度開催地幹事，近畿大学の山口公志氏に深謝申し上げます．また，開催地幹事の八丈野孝氏をはじめ，愛媛大学および愛媛県農林水産研究所の関係各位のご尽力とご協力によって，非常に活気のある部会を開催できたことを，ここに記して感謝申し上げます．（小林括平・鮎川　侑）

写真 1　講演会の様子

写真 2　情報交換会の様子

2. 第 18 回植物病害診断教育プログラム

横浜国立大学（横浜市保土ヶ谷区）において 9 月 23 日～27 日の日程で植物病害診断教育プログラムが開催されました．この行事は例年参加希望者が多いのですが，本年度も募集定員を大きく上回る応募がありました. 最終的に，これまでの応募状況等を勘案し，24 名の参加者を決定しました．プログラムの内容は，開催地である関東地区神奈川県の特色を活かし，植物病院を運営している法政大学，東京大学と農研機構からのコンテンツ提供をいただき，東京農工大学と横浜国立大学がそれぞれ特色有る実習内容を提供するという形を企図しました．5 日間という限られた時間では有りましたが，様々な新知識と体験をしていただけたものと思います.

写真 1　全員参加の情報交換会

写真 2　LAMP 法の実演

初日 23 日月曜日は開催地挨拶と参加者自己紹介のあと，北宣裕氏（元神奈川県農業技術センター所長，前日本大学教授）の「病害防除の勘どころ―病害防除のゴールと戦略―」と題した「特別講演 1」で植物病理学の概要から診断と同定，防除の実際に加え，キャリアアップに関する話題についてお話しいただきました．さらに，一瀬勇規氏（岡山大学）には学会長特別講演として「植物病原細菌のべん毛を介した植物相互作用」をお願いしました．その後，情報交換会を開催し参加者相互の交流を深めました．

二日目には法政大学の鍵和田聡氏による「ウイルスの診断」を終日実施していただき，植物ウイルス学の概論と診断法についての講義と，植物ウイルス病の RT-PCR 診断の実習をご担当いただきました．植物試料からの RNA 抽出と RT-PCR，アガロースゲル電気泳動による検出にいたる実習を行いました．さらに，待ち時間を使って法政大学植物医科学センターの取り組みについても詳しいご説明をいただきました．

三日目の実習は，東京大学の渡邊健氏による「サツマイモに発生する病害虫・生理障害」についての講義と実習をご担当いただきました．何と 10 種類におよぶサツマイモ病害虫・生理障害の試料が準備され，参加者が事前の講義と資料に基づいて診断するという内容でした．これはクイズ形式の実習でしたが，完全に正解を導き出した参加者もあり大いに盛り上がりました．また，東京大学植物医科学とオンライン誌の iPlant の紹介もありました．

四日目の午前中は横浜国立大学の小倉里江子氏による発光レポーター法に関する講義と実験があり，午後は東京農工大学の有江力氏が主導するバナナパナマ病に関する研究について，講義と LAMP 法による診断の実習がありました．LAMP 法の実技に関しては，実際に現場で活動中の農工大大学院生の戸畑幸治氏，横井智希氏，高橋園香氏による活気ある説明と実演指導でした．

最終日午前中には，前日の発光レポーター法の結果観察と研究室見学を実施しました．最後には農研機構の眞岡哲夫氏による「植物病害診断のスタートアップ企業による事業化―植防法改正と輸出検疫登録検査機関を契機に―」と題した特別講演がありました．眞岡氏のお話はプログラムの締めにふさわしい，参加者の実務に直接役立つ内容でした．

次回の第 19 回は九州大学において開催されることが決定しています．これまで同様，充実したプログラムと成る予定ですので，ふるってご参加ください．　　（平塚和之）

3. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第 58 回植物感染生理談話会

令和 6 年度の植物感染生理談話会を名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流会館において 9 月 1 日～3 日の日程で開催しました．大型の台風 10 号が九州地方で停滞し，四国に上陸してから本州を横断する予報でしたが，太平洋側へと向かい，さらにゆっくり北上した後に温帯低気圧となりました．しかし，各地で大雨がもたらされたため，計画運休による交通網の乱れが生じました．そこで，事務局（竹本大吾先生，千葉壮太郎先生，佐藤育男先生）では急遽対面形式からハイブリッド形式に変更し，前日に数時間リハーサルを行って対応いたしました．このような状況下での開催でありましたが，学生 63 名（うちオンライン 22 名），一般 60 名（うちオンライン 21 名）の計 123 名の参加者が集まり，講師による講演とポスター発表が行われ，ハイブリッド形式ではありましたが，参加者の熱意によって深い議論が交わされました（写真 1）．ご参加頂いた皆様には深く御礼申し上げます．

「植物感染生理談話会」の歴史について振り返れば，「植物病理化学談話会」（1965～77）と「植物感染機作研究談話会」（1967～77）が 78 年に統合され「植物感染機作・病理化学談話会」として 5 年間合同開催された後（1978～82），83 年から現在の名称に変更されました（日本植物病理学百年史）．1965 年（昭和 40 年）の第 1 回植物病理化学談話会から数えて今年で 58 回目の開催となります．本談話会はまさに 20 世紀後半からの我が国の植物感染生理学の発展と後進の育成に一翼を担ってきたと思います．

今回のテーマは，～植物感染生理学の「いま」と「課題」～と銘打ち，植物感染生理学研究フロントランナー16 名の先生方に講師として登壇頂きました．植物–微生物間相互作用に関する研究は，日々重み・深みが増しており，世

写真 1　会場の様子

界レベルで大きな流れとなっています．一方で，未解決な問題も山積しているのが現状であると考えます．本談話会においては，「微生物群と植物の相互作用」，「宿主植物の病原菌認識機構」，「病原菌の巧妙な感染戦略」，「ゲノムレベルでの抵抗性遺伝子の進化」，「相互作用機構に基づいた病害抑制戦略」などの現状について深い洞察を踏まえて紹介頂き，今後どのような課題を解決する必要があるのか，あるいは新たな学問の方向性について考える機会を得ることができたと感じております．ご多忙にもかかわらず，快くご登壇と要旨の執筆をお引き受けいただいた講師の先生方ならびに会議の進行に快くご協力いただいた座長の皆様方に感謝申し上げます．

二日目に開催された学生・若手研究者によるポスター発表は 45 題ありました．各発表者による「60 秒プレゼンテーション」の後，同日の夕刻にポスタービューイングとディスカッションが行われました．発表者には PC を持参頂き，ブレイクアウトルームを通じてディスカッションして頂きました．60 秒プレゼンテーションによる事前の説明もあり，議論は大いに盛り上がりました．また，審査員による学生優秀発表賞の審査が行われ，岡山大学大学院 環境生命自然科学研究科の渡邊雄太さん（タバコ野火病菌が持つ 2 つの Genomic islands の同定と機能解析）と近畿大学大学院 農学研究科の吉久采花さん（イネ NB-LRR 型受容体 Xa1 活性化時の免疫誘導経路）の両名が受賞者として選出されました（写真 2）．本当におめでとうございます．今回は大変接戦であり，甲乙付けがたい優秀な発表が多くあったように思います．益々の研究の進展を期待しています．なお，次年度の第 59 回談話会は，鳥取大学の上中弘典先生を代表として，9 月 3 日～5 日の日程で鳥取大学（鳥取キャンパス）農学部 1 号館にて開催される予定です．

最後に，猛暑の中，多忙にも関わらず快くご登壇と要旨執筆をご了解頂いた講師の先生方には，末筆ながら厚く御礼申し上げます．また，本談話会を開催するに当たって病理学会事務局の関係各位に深くお礼申し上げます．共催としてご支援頂いた名古屋大学生命農学研究科にこの場を借りて感謝申し上げます．（吉岡博文）

写真 2　学生優秀発表賞を受賞した渡邊さん（左）と吉久さん（右）

(2) EBC 研究会ワークショップ 2024

今年度のワークショップも昨年度と同様，東京農業大学農学部（神奈川県厚木市）を会場に，9 月 12 日（木），13 日（金）の 2 日間で開催しました．今回は約 80 名の参加をいただきました．

初日，運営委員代表の川口章氏（農業・食品産業技術総合研究機構）の挨拶から始まり，第一部【近年問題となっている重要病害の最新研究】として，「開花期感染がリンゴ褐斑病の広域的な発生に及ぼす影響」 猫塚修一 氏（岩手県農業研究センター），「青森県におけるリンゴ黒星病の最新の防除対策とその検証」 平山和幸氏（青森県産業技術センターりんご研究所），「カンキツ黒点病に対するマンゼブ水和剤の耐雨性と効果発現機構」 蓮沼奈香子氏（日産化学株式会社），「ブドウ根頭がんしゅ病菌の生態に迫る」 川口章氏の 4 つの講演をいただきました．

写真 1　講演の様子

写真 2　パネルディスカッションの様子

二日目，第二部【生産現場での実用例】として，「植物防御によるアザミウマ忌避とプロヒドロジャスモンの実用化」 安部洋氏（理化学研究所バイオリソース研究センター），「LED 光源を用いた UV-B 照射によるイチゴうどんこ病およびイチゴ炭疽病の抑制」 内橋嘉一氏（兵庫県立農林水産技術総合センター）の 2 つの講演をいただいた後，二日間のまとめとして，演者の皆さん全員に登壇いただき，池田健太郎氏（法政大学生命科学部）の司会で 40 分間程度のパネルディスカッションを設けました．参加者からの質問，講演では語られなかった想いなど，会場内でのやり取りは EBC 研究会のワークショップらしい内容だった印象です. 最後に, 前運営委員代表の田代暢哉氏((一社）プラントヘルスケア研究所）にワークショップを閉めていただきました.

また，初日の講演終了後には厚木市内で 40 名の有志による情報交換会もあり，乾杯のご発声を小河原孝司氏（茨城県農業総合センター），中締めは池田健太郎氏にいただきましたが，その後も深夜まで情報交換と議論が尽きませんでした.

EBC 研究会では，来年もワークショップを開催する予定です．より良いワークショップを目指して運営委員会で検討を重ねて参ります．次回も楽しみにしていただき，ぜひご参加いただきたいです. どうぞよろしくお願いします.

（篠原弘亮）

【関連国際会議開催状況】

（1）第 20 回国際植物保護会議 IPPC 2024

7/1–5 の日程で，ギリシャ・アテネにおいて，第 20 回国際植物保護会議（IPPC 2024）が行われました．60 カ国，800 名超えの方が参加され，5 日間に亘って，病害，虫害，雑草害，防除（農薬など）に関わる議論が行われました．国際植物保護会議地域 10 から日本植物病理学会を介して募集した渡航補助を受けられた名城大学の藤原和樹先生が学生を連れて参加され，コンカレントセッションでの口頭発表と学生のポスター発表をされました．千葉大などの学生が積極的に活躍しておられました．日本からは 15 名程度の参加者でした．なお，理事会も 3 日間に亘って開催され，今後参加者を増やすための施策などについて議論されました．この中で，日本での各関連学会における渡航補助について良い取り組みであるとのことで紹介されました．

今回の会議がコロナの影響で 1 年後ろ倒しになったため，次回は元に戻り，2027 年 11 月に，ニュージーランド，クライストチャーチで開催の予定です．　　（有江　力）

（2）XX International Plant Protection Congress Report

The XX International Plant Protection Congress (IPPC) took place in Athens, Greece, from July 1 to July 5, 2024. This international conference brought together experts from around the world to discuss and share the latest technologies and strategies in plant protection. This year's congress focused on sustainable agriculture and ecosystem protection in response to global environmental changes. The program featured nine plenary lectures, 64 concurrent sessions, three satellite lectures, and two satellite symposiums. During this congress, I delivered a talk titled "Challenges and Prospects for Control of Citrus Greening Disease in Japan" in the concurrent session on "Impact and Control of Transboundary/Invasive Pests (10A/B)."

A notable highlight of the congress was the keynote speech by Dan Bebber from the University of Exeter, who presented cutting-edge research on the effects of global climate change on plant protection. His talk highlighted the future impacts of climate change on food production and ecosystems, emphasizing the urgent need for innovative approaches in plant protection. The IPPC program also addressed critical topics such as "Sustainable Agricultural Practices," "Impacts of Climate Change on Agricultural Ecosystems," "Development of Pest and Disease Management Technologies for Environmental Conservation," and "Biosecurity and Food safety." It seemed that the sessions related to these topics underscored the importance of cross-sectoral collaboration between administrative bodies and academic researchers.

It also appeared that the congress emphasized the significance of research and development aligned with the EU Farm to Fork strategy, highlighting the need to balance plant protection and environmental conservation. In the field of plant protection, notable advancements were showcased, including the development of new biocontrol agents as promising alternatives to conventional chemical pesticides. The introduction of digital agriculture technologies, such as precision farming tools, was also a key focus. Progress in crop monitoring technologies using drones and artificial intelligence was highlighted, demonstrating how these innovations can enhance disease diagnosis and control.

Furthermore, the congress provided a platform for discussing the challenges and opportunities in plant protection. The necessity of scientific and technological advancements to achieve sustainable agricultural practices and environmental protection was a recurring theme. The diverse research

activities presented at the conference are expected to significantly contribute to future developments in plant protection. The knowledge and insights gained from this congress will undoubtedly play a crucial role in shaping the future of sustainable agriculture and ecosystem protection.

Overall, the XX International Plant Protection Congress in Athens provided a comprehensive and insightful overview of the current state and future directions of plant protection. The congress highlighted the interconnectedness of global environmental changes, agricultural practices, and ecosystem health, reinforcing the importance of a holistic approach to addressing these complex challenges. As we move forward, the discussions and collaborations initiated at this congress will serve as a foundation for developing innovative and sustainable solutions in plant protection, ultimately contributing to a healthier and more resilient global agricultural system.

（Kazuki Fujiwara）

（3）アジア植物病理学会議 ACPP 2024

中国，吉林省長春において 8 月 3 日から 6 日の日程で開催されたアジア植物病理学会議（Asian Conference on Plant Pathology）は，2000 年に中国で第 1 回が開催され，シンガポール，インドネシア，オーストラリア，タイそして 2017 年に韓国にて開催されて来ました．2020 年には日本開催が計画され，コロナ禍により延期，その後開催中止となった経緯があります．

今回は日本からの中国渡航にはビザが必要であったことなどが災いし，日本からの参加者は少なかったのですが，基調講演を務められた久保康之氏を始めとして，日本人研究者の各会場における活発な発表がありました．開催場所は長春市中心部の十分な収容力がある立派な会議場で，国外からの参加者には隣接したホテルが割り当てられ利便性は良好でした．また，期間中の食事は全て含まれており，ビュッフェ形式で十分な量と質の食事が提供されました．参加者の国数は 25ヶ国に及び，総参加者数は公表されませんでしたが，発表数は Plenary Lecture が 10 題，Concurrent Session 口頭発表は 99 題，学生発表が 30 題，ポスター発表が 205 題ありました．残念ながらおそらくはビザの問題等で，海外からの参加者はやや少なく，筆者が担当した Country and region reports に関しては 9ヶ国のみでした．しかし，中国国内からの参加者は千人近くで，各会場は大盛況でした．

次回は 2027 年にベトナムでの開催が決定していますが，Quy Nhon という最近日本でも人気が高まっているビーチリゾート地が会場になるとのことでした．さらに，各国代表者会議において 2030 年日本開催の打診がありましたが，2020 年に開催出来なかった経緯もあり，前向きに検討する必要があると思われます．（平塚和之）

【今後の学会活動の予定】

1. 2025 年度大会
   日時：2025 年 3 月 26〜28 日
   場所：サンポートホール高松（高松市）
   事務局：香川大学

2. 第 5 回日韓合同シンポジウム
   日時：2025 年 3 月 25 日
   場所：サンポートホール高松（高松市）

3. 部会
   （1）北海道部会
   日時：2024 年 10 月 12〜13 日
   場所：北海道大学（札幌市）
   （2）九州部会
   日時：2024 年 11 月 14〜15 日
   場所：アバンセ（佐賀市）

4. 談話会・研究会等
   （1）土壌伝染病談話会
   日時：2024 年 10 月 17〜18 日
   場所：文部科学省研究交流センター（つくば市）
   （2）植物細菌病談話会
   日時：2024 年 11 月 20〜21 日
   場所：文部科学省研究交流センター（つくば市）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは，身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております．会員の各種出版物のご紹介，書評，学会運営に対するご意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい．下記宛先まで，よろしくお願い申し上げます．

投稿宛先：〒 114-0015　東京都北区中里 2-28-10
日本植物防疫協会ビル内
学会ニュース編集委員会
FAX：03-5980-0282
または，下記学会ニュース編集委員へ：
門田育生，佐々木信光，染谷信孝，冨髙保弘

編集後記

学会ニュース第108号をお届けします．本号は，9月末までに開催された各部会や研究会等の活動報告を中心に掲載しました．対面での開催が増えた影響もあるかと思いますが，どの会場でも活気のある交流が行われたようです．特に，感染生理談話会では台風の影響で急遽ハイブリッド開催へ変更となる中，対面またはオンラインで多くの方々にご参加いただき，活発な議論と発表が行われたことを嬉しく思います．各イベントの開催と運営に多大なご尽力をいただいた事務局の皆様に感謝申し上げます．

今年はICPPとACPPが開催され，参加者からご報告をいただきました．日本からの参加者は多くなかったようですが，国際学会に参加して海外の方々との交流を深めることは，植物病理学分野や本学会の発展にとって重要だと思われます．現在第5回日韓シンポジウムの準備が着々と進んでおりますので，この機会をお見逃しすることなく，是非とも皆様には本大会と合わせてご参加いただきますようお願い申し上げます．

最後に，会員の皆様へメールにてお知らせしておりますが，8月より学会ホームページをリニューアルいたしました．研究集会の予定などの最新情報にアクセスしやすくなっておりますのでご活用ください．また，学会ニュース第106号よりホームページ上の写真はカラーで掲載されています．冊子体購読の方はホームページからも学会ニュースをご覧ください．学会活動の情報発信に力を入れていきたいと考えておりますので，ホームページへのご意見やご提案がございましたら是非お寄せください．

（門田育生）

日本植物病理学会賛助会員（ABC 順）

アグロカネショウ株式会社
307-0001　結城市結城 9511-4　0296-21-0175

アリスタライフサイエンス株式会社
103-0027　中央区日本橋 1-4-1 日本橋一丁目三井ビルディング 19 階　03-5203-9350

バイエルクロップサイエンス株式会社
100-8262　千代田区丸の内 1 丁目 6-5　03-6266-7413

BASF ジャパン株式会社
103-0022　中央区日本橋室町 3 丁目 4 番 4 号 OVOL 日本橋ビル 3 階　03-5291-3821

コルテバ・ジャパン株式会社
100-6111　千代田区永田町 2-11-1 山王パークタワー　03-3519-3243

エフエムシー・ケミカルズ株式会社
100-0004　千代田区大手町 1-1-1 大手町パークビル 8 階　03-5208-1010

ホクサン株式会社
061-1111　北広島市北の里 27-4　011-370-2103

北興化学工業株式会社
103-8341　中央区日本橋本町 1-5-4 住友不動産日本橋ビル　03-3279-5831

井上石灰工業株式会社
781-0112　高知市仁井田 1641　088-847-0615

石原産業株式会社
525-0025　草津市西渋川 2-3-1　077-562-3574

株式会社 JEVIC
230-0054　横浜市鶴見区大黒ふ頭 15 小此木ビル 5F　045-834-7577

カゴメ株式会社
329-2762　那須塩原市西富山 17 番地　0287-36-2935

科研製薬株式会社
113-8650　文京区本駒込 2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス　03-5977-5032

クミアイ化学工業株式会社
110-8782　台東区池之端 1-4-26　03-3822-5165

株式会社クレハ　生産・技術本部 いわき事業所
974-8686　いわき市錦町落合 16　0246-63-5111

株式会社　久留米原種育成会
830-0064　久留米市荒木町藤田 1422-1　0942-26-2943

協友アグリ株式会社
103-0016　中央区日本橋小網町 6-1 山万ビル 11F　03-5645-0700

丸和バイオケミカル株式会社
101–0041　千代田区神田須田町 2–5–2 須田町佐志田ビル　03–5296–2313

三井化学クロップ＆ライフソリューション株式会社
103–0027　中央区日本橋 1–19–1 日本橋ビルディング　03–5290–2700

株式会社日本医化器械製作所
543–0014　大阪市天王寺区玉造元町 3 番 9 号　06–6765–0223

日本化薬株式会社
314–0255　神栖市砂山 6　0479–40–2771

日本農薬株式会社
104–0031　中央区京橋 1–19–8 京橋 OM ビル　03–3274–3415

一般社団法人日本植物防疫協会
114–0015　北区中里 2–28–10　03–5980–2181

日本曹達株式会社
100–8165　千代田区大手町 2–2–1　03–3245–6210

株式会社ニッポンジーン
930–0834　富山市問屋町 2–8–16　076–451–6548

日産化学株式会社
103–6119　中央区日本橋 2–5–1 日本橋髙島屋三井ビルディング 18・19 階　03–4463–8330

クロップライフジャパン
103–0025　中央区日本橋茅場町 2–3–6 宗和ビル 4 階　03–5649–7191

OAT アグリオ株式会社
101–0052　千代田区神田小川町 1–3–1 NBF 小川町ビルディング 8 階　03–5283–0251

大内新興化学工業株式会社
103–0024　中央区日本橋小舟町 7–4　03–3662–6451

株式会社理研グリーン
110–8520　台東区東上野 4–8–1 TIXTOWER UENO 8F　03–6802–8587

サンケイ化学（株）
891–0122　鹿児島市南栄 2–9　099–268–7588

株式会社エス・ディー・エスバイオテック
101–0022　千代田区神田練塀町 3 ASK ビル 5 階　03–6867–8311

シンジェンタジャパン株式会社
104–6021　中央区晴海 1–8–10 オフィスタワー X 21F　03–6221–3819

住化農業資材株式会社
541–0043　大阪市中央区高麗橋 4–6–17　06–6204–1139

住友化学株式会社
103–6020　中央区日本橋 2–7–1 東京日本橋タワー　03–5201–0281

株式会社トーホク
321–3232　宇都宮市氷室町西原 1625　028–667–1321

ヴィルモランみかど株式会社
298–0202　夷隅郡大多喜町下大多喜 2789–1　0470–82–2413

横浜バイオテクノロジー株式会社
240–8501　横浜市保土ヶ谷区常盤台 79–7 横浜国立大学総合研究棟 S703–1　045–339–4160

米澤化学株式会社
601–8455　京都市南区唐橋芦辺町 14　075–681–9526

全国農業協同組合連合会
100–6832　千代田区大手町 1–3–1 JA ビル 33 階　03–6271–8289

全国農薬協同組合
101–0047　千代田区内神田 3–3–4　03–3254–4171